

# 科学リテラシーと科学研究のありかた

横山輝雄

南山大学人文学部

近年科学研究や技術開発は、目的を明確にしてそれを何年かの計画で実現するというスタイルでなされることが多い。かつてなら、アメリカのアポロ計画、日本の第五世代コンピュータ計画などがある。予算に上限がある以上こうしたことが必要かもしれない。しかし、科学研究とりわけ基礎科学研究は、こうしたスタイルになじむのだろうか。また、それと関連して、科学と技術に関する「リニア・モデル」、すなわち「基礎研究」「応用研究」「開発研究」の順序で時間的に科学技術が展開する、といったイメージが、一般人だけでなく科学者自身や科学に関わる政策決定に従事する人々の中にも見られる。現在この二つの科学についての見方が支配的であるが、科学基礎論の立場からこれにはおさまらない多様な科学観を提示していくことが必要ではないだろうか。

「リテラシー」は、かつては「識字」のことであったが、現在ではそれから転じて「社会生活において必要とされる知識・技能」の意味で、「情報リテラシー」「メディア・リテラシー」などとして用いられている。「科学リテラシー」は、20世紀の終わりごろから世界的に問題とされるようになってきた。そこでは当初「科学啓蒙型モデル」、つまり一般人は科学知識をもっておらずそれを埋めるという「欠如モデル」が支配的であったが、その後それに代わって「双方向モデル」あるいは「文脈モデル」が提案されている。

脳神経科学リテラシーに関して、大学教育で何をすればよいかのプロジェクトに参加したが、そこでの成果の一つも同じであった。当初は、脳科学の専門研究者養成課程の教科書を「一般向け」にするという「欠如モデル」で作業が行われたが、その後試行的に行った大学生に対する授業などから、それだけでは脳神経科学リテラシー教育としては十分ではないことが明らかになった。脳科学と社会の関係、脳科学と疑似科学の問題などについて、脳科学の専門教科書では取り上げていない問題をもリテラシー教育に取り入れることになった。しかし、この場合既存の教科書に頼るわけにはいかず、新たに内容をつくることになるが、ここでは「科学とは何か」についての科学基礎論的検討が重要な役割を演ずる。

これまで、科学基礎論はこうした問題にはあまりかかわってこなかったが、今後はこうした方面にも広がっていくことが求められよう。基礎科学型の研究スタイルをとってきた科学基礎論がこうした応用研究型の問題にかかわることは、その研究のありかたやスタイルの問題について自己言及的な事態が生じることになる。